

令和7年産米のコシヒカリ重点技術対策

重点 ①後期栄養維持 ②適期中干し ③病害虫防除(斑点米カメムシ類) ④作期分散

◎目標:1等米比率:90%以上 収量:510kg/10a 玄米タンパク質含有率 6.0%

異常高温に備える技術

1 気象変動に対応できる土づくりと根域の確保

- (1) 土壌診断に基づく堆肥や土づくり資材(特にケイ酸、鉄)の施用による地力維持・向上
- (2) 稲わら、もみ殻等の有機物の秋すき込みの実施
- (3) 根域を広げ、根の健全な発達を促すため、耕深15cmを目標に耕うん作業を実施

2 (重点) コシヒカリの品質確保が可能な作付計画、作期分散

- (1) 播種時期、育苗様式等の組み合わせによる大規模経営体でのコシヒカリ作期拡大
- (2) 複数品種の作付による大規模経営体での作期分散およびリスク分散の推進

3 健苗育成、良質茎の早期確保

- (1) 田植時期に合わせた浸種及び適期播種の徹底、弁当肥の施用による活着促進
- (2) 田植え時期は、地域条件と苗の生育状況を確認し、5月中下旬を基本として健苗の適期移植に努める。活着後はやや浅水で初期生育を促進

4 (重点) 適期中干しの実施(大柄にしないイネづくり)

- (1) 田植え後25日を目安に茎数を確認し目標穂数の7~8割を確保したら中干し開始(遅くとも田植え後30日までに開始し、本格的な梅雨になる前に実施する)

異常高温に対応する技術

1 (重点) 後期栄養維持(穂肥・水管理)

- (1) 生育診断に基づく適正な穂肥施用
 - ・分施肥体系:1回目穂肥は生育診断を踏まえ施用、2回目穂肥は葉色を見て確実に施用
高温が続き出穂期の葉色が目標を下回ると予想される場合は3回目の追加穂肥を施用
分施肥体系で3回目の追加穂肥の対応が難しい場合は2回目の穂肥の増量を検討する。
 - ・全量基肥体系:出穂期の葉色が目標を下回ると予想される場合は追加穂肥を施用
(特に有機入り全量基肥は穂肥成分が不足するので追加穂肥を前提に施肥設計する)

※ 分施肥体系、全量基肥体系いずれも追加穂肥は速効性の肥料を施用する。(特栽米以外)

- (2) 登熟向上のための水管理
 - ・登熟期間は飽水管理を徹底し、落水期は出穂期25日後以降とする。
 - ・輪番、番水など、地域の水管理体制を確認し、こまめな水管理ができるよう準備

2 適期収穫と適正乾燥・調製の徹底

- (1) 黄化粳割合85~90%を確認し適期収穫。収穫のピークが収穫適期になるよう収穫開始

※ 高温登熟年は品質低下防止のため早めに収穫を開始する。

- (2) 粳水分に応じた乾燥温度で胴割粒の発生防止乾燥速度に注意し、過乾燥を防止する。
- (3) 適正流量による丁寧な調製。色彩選別機を活用した整粒歩合の向上

3 (重点) 病害虫防除の徹底

- (1) 斑点米カメムシ類:農道畦畔及び水田内雑草管理の徹底と適期・適切な薬剤防除の徹底
- (2) ドローン等を利用した液剤防除体制の整備と利用推進
- (3) 葉いもち:コシヒカリBLは、育苗箱施用剤等による葉いもち防除を必ず実施

省力化・規模拡大への対応

規模拡大が進む中、安定生産技術対策と並行し、省力・低コスト技術導入を推進。

- (1) ドローン 防除の活用に加え、省力施肥技術としての追肥での利用についても推進
- (2) 低コスト技術の点検 (密苗 老化苗多い→移植時期に合わせた播種回数の分散)
- (3) 省力・低コスト技術の情報共有